老愛小説

古屋健三

論創社

目次

虹の記憶　1
老愛小説　101
仮の宿　195
あとがき　312

虹の記憶

日本に帰ったら、真先に浄瑠璃寺を訪ねようと思った。いや、もっと正確に言うと、浄瑠璃寺に行きたいなと思ったとき、日本へ帰る気になった。

グルノーブルに来てから四年がたっていた。来る日も来る日も、図書館の窓から山をみて過ごしていた。大学図書館の閲覧室はビルの五階にあって、その壁一杯に開いた嵌めこみ窓からは市街が一望でき、その先にフランス・アルプスのベルドンヌの壮麗な山脈、右手に第二次大戦時のレジスタンスで名高いヴェルコール山塊、左手に岩肌をむき出しにしたバスチーユの丘を望むことができた。閲覧室に入るたびに眼を洗われるパノラマで、これでは落ちついて活字を追うことなどむりな話だった。グルノーブル大学学生は、他大学学生にくらべて読書量が圧倒的に少ないと嘆いていた先生がいたが、図書室が展望台なんだから必然の結果だなと同情する気も起こらなかった。

図書室中央の窓際の席に、朝九時の開館から夜七時の閉館まで、昼食の休憩時間二時間は別にして、坐りつづけて、ぼんやり外を眺めていてもめったに退屈しなかった。窓の景色は四季を通じてたえず変化し、一刻も同じ絵にとどまることはなかった。もっとも天気が安定しているはずの初夏の五月や初冬の十月でも、風景はきっちりと定まることはなかった。たえず風が行きかい、光はとめどなく瞬いてみえた。バスチーユ岩塊の麓には別荘が散在していたが、そ

れら家家は、その時の光の具合によって、こんもりと茂った樹木のかげに隠れてみえないこともあり、逆に、木木の緑を押しのけて、赤や黄の壁が目に迫ってくることもあった。ガラスを眩しく反射させて、直視できない光体と化することもあり、光をすべて吸いこんで庭に立つ人の姿を明確に浮きあがらせることもあった。風景全体の輪郭は変わるわけではないのだが、とるに足らないディテールがどこかで刻一刻と変化していて、ある一時の風景がそっくりそのまま再現されることは二度となかった。ここでは、風景と対峙することが、時を超えた永遠と向き合うのではなく、まさに時の移ろいとしての人生と顔つき合わせることになった。

季節の変わりめになると、当然ながら、この変化は、劇的と言うよりほかにないほど、メリハリが鮮明になった。朝、一点の雲もなく晴れあがった空にやがて墨を流したような黒い筋が一筋、二筋描きこまれると、たちまちそれが黒雲に固まって渦を巻き、驟雨と溶けて街にふりそそいできた。街全体が真暗闇に塗りこめられることもあり、黒雲の間からところどころ驚くほど透明な青空が抜け、そこから陽光が天国の矢のようにおちてくることもあった。雲の黒幕が引き払われると、色濃い虹が現れ、その七色の濃淡は一定ではなく、たえず変化した。虹が現れてから消えるまで、虹という実体が姿を変えるというより、変化のシンボルとしての華麗な役を演じているようにみえた。虹のつきることのない変幻に我を忘れて引きこまれるより、

虹の華麗なショウを見物している感じがした。宇宙の神秘に触れた感動よりも、趣向を凝らした手品をみせられた驚嘆の念が先に立った。日本ではこんなに鮮やかな原色の虹をみたことはないなと思ったとき、あの、いかにも淡く、儚い日本の虹を懐かしく思い出していた。

夕立ちにふりこめられた浄瑠璃寺の堂内から外に出たとき、池を距てた三重塔の背後の山の上に微かな虹がかかっていた。ふと空を仰いだとき、虹は鮮明にみえたのだが、じっとみつめていると、空の青に溶けこんでしまって、かかっているのかいないのかはっきりと確認できないほど頼りなかった。いったん眼を他に転じて、虹のあるべき空にふたたび眼を戻すと、その刹那だけ虹は間違いなく浮かびあがっていた。そして、しばらくみつめていると、また消えた。一緒にいた父も空を仰ぎながら、あるかなきかの虹の幻に魅入られていた。

「美という奴は恥ずかしがり屋なんだな。正体をまざまざと曝すことはないんだ。われわれが心して祈っていると、祈願の果てにちらりと拝めるものなんだ。みえるようでみえない、みえないようでみえるこの虹は美の象徴だな。こんなかすかなものがみえるのも、お堂の薄闇に眼が慣れるまで我慢したおかげだ。闇で眼が洗われたのだ」

父と浄瑠璃寺を訪ねたのは、小学校二年生、七歳の春の終わりだが、終始虚脱して、寂しそうな父の様子、とても七歳の子どもに語り聞かせているとは思えない、しみじみとした感想な

ど、ふしぎとよく覚えている。このときの父はどうみても普通ではなかった。父になにが起こったのか、子どもには窺い知れなかったが、父が異様に緊張している危うさだけははっきりと感じとることができた。その常ならざる放心に応じるようにして、闇が立ちこめ、虹がかかった奇蹟だけは子どもにも信じられた。

グルノーブルの極彩色の虹に圧倒されればされるほど、浄瑠璃寺で眼にした絶え入りそうな虹がとてつもなく懐かしく思い出されてきた。浄瑠璃寺のあの微妙な土地にふたたび立ちたいと思ったとき、日本に帰ろうという気が強く動いた。

もちろん、こうした感情的な理由だけで帰国に踏みきったわけではない。大学の恩師が定年退職して、その後のポストに任命されたのが直接的な帰国の動機だが、ただ、フランスの空気がこれほど息苦しく感じられなければ、ふたつ返事で帰国はしなかったはずである。大学という現実に帰ってきたというより、浄瑠璃寺という幻想に帰ってきたつもりだった。

しかし実際には、三月に帰国してすぐ浄瑠璃寺まで足を延ばすわけにはいかなかった。住む部屋を探したり、就職に必要な書類をそろえたりしているうちに、講義が始まり、新しい生活のテンポにやっと慣れたときにはすでに六月の中旬になっていた。絶え間なく雨が降り、フランスで乾燥しきった細胞がとめどなく水をふくみはじめ、大儀なほど身体が重くなった。暇さ

えあれば、どこででも居眠りをし、さまざまな夢をみた。あるとき金色の仏像が闇のなかを光り輝きながら歩み寄ってくる夢をみた。どんどん近寄ってきて、踏みつぶされそうになり、恐怖感から目が覚めた。浄瑠璃寺の仏が招(よ)んでいるなと即座に思った。

父とふたりきりで堂内に閉じこめられたときも恐怖感は同じように強かった。激しい雷雨のなか、仏たちの姿は稲妻に照らされて闇のなかから浮きあがった。浮きあがっては倒れかかってきて、また闇に消えた。父の身体にぴったりと貼りついて、恐怖に耐えた。

「夕立ちだ。すぐにやむ」

と、父は励ましの言葉を口にしたが、それが口先だけの慰めに過ぎないのは、つないだ父の手が冷たく、かすかに震えているので、明らかだった。父は、七歳の子どもとは違って、単純に雷をおそれているのではないだろうが、雷雨によって色濃く充ちた堂内の闇に戦(おのの)いているのは間違いなかった。

いま浄瑠璃寺を再訪しても、夕立ちに降りこめられるとは限らないし、稲妻に照らされるとも思えなかった。ましてや虹を仰げるとはとても望めなかった。しかし、すくなくとも、浄瑠璃寺の闇には再会できるはずだし、その闇のなかで金色に輝く仏たちを拝めば、体内に溜まった正体不明の重い疲れも明確な形をとるはずだった。

老愛小説

夫婦が老いを意識するのはどういう局面でしょうな。

休み時間で人の出入りがあわただしく、ざわついた教員室に、重い、沈んだ声が場違いに響いた。一瞬時間がとまったように教員室は静まりかえり、胴間声があがった先に耳目が集まった。この三月に六十で定年退職を控えた国文学教授が、講義を終えて真向かいに腰をかけた同年輩の言語学者に真剣な面持ちで問いかけたのだった。声をかけられた言語学者は時刻をきかれたわけでもないのに腕時計にちらりと目を走らせ、そこに満足な答えを読んだかのように相好を崩し、先生の場合はどうだったんですと挨拶をかえした。

放った弾丸がはねかえってきた形となった国文学者は不満そうに唇を突き出していたが、やれやれと背を正し、おもむろに語り出した。女房と身体を重ねていましてね、身を起こしたら、あいつの体毛に一筋白く光る線がみえたんです。それが雪のつもった野道を連想させましてね、ずいぶん長いこと、数えきれないくらい、こいつの裸にこだわってきたんだなと気がついたんです。とたんに、下腹から空気がすっと抜けていきました。そして、その穴から新婚の夜とか、忘れていたむかしのことがつぎつぎと湧きあがってきて、とても抑えこめません。そうしたら、もう立たないんですわ。

およそ教員室らしからぬ話の展開に、耳目をそばだてていた人たちはあわてて、わざとらし

くざわざわ動き出した。国文学の先生は周囲がざわめき立ったのにすこしも動ぜず、講義をする調子で腹から野太い声を出して話しつづけていた。悪びれたところがみじんもないので、いやらしい感じはしなかった。見苦しかったのはむしろ相手の言語学者の方だった。同じ仲間とみられたくないと思ったのか、顔を赤らめ、耳ざわりなかん高い声で、つんのめるようにまくし立てていた。私どもの場合はね、いまを生きる充実感がなくて、時間がすんなりと前へ流れていかないんですよ。女房はなんの脈絡もなくむかしのことをふいと思い出してはしつこくからむんです。昨日も二十年まえにフランス大使館で会食したときのことを言い出しましてね。食事の間中私が大使や文化参事官と楽しそうにお喋りしていたのに、デザートになると急に黙りこみ、それまで見向きもしなかった自分の方をじっとにらんだ。あの陰険な目つきはなんなの、なにを言いたかったのと言いつのるんです。そんなこといまさら咎められても、なにも覚えてないんですよ。だいたいなんでフランス大使に招ばれたのか、なにを語り合ったのか、他に客はだれがいたのか、そういう肝腎なことすらおぼろなんですから。こんな風に女房は忘れたままにしておけばいい過去をひとつひとつ掘り起こしては突きつけてくるんです。毎日毎日こんな訊問にさらされていると、ひょっとして自分はとんでもない悪事を働いているんではないかと不安にかられてくるんです。女房の顔をみるのがだんだん億劫になってきましてね。言

語学者は実際に追い立てられているようにきいきい声でせかせかと話したので迫真力はあったが、力こぶが入り過ぎていて頭をおさえつけられる息苦しさだった。この先生の講義は一時間聴いたら、ぐったり疲れるだろうなと学生に同情した。

年をとると、夫婦はばらばら、ひとりぼっちですかなと国文学者は当然の結論のようにさらりと言ってのけた。言語学者はなにか言いたそうに口を動かしかけたが、声を出さずにそのままうつむき、しらけた顔に崩れた。これ以上言葉を重ねても、それこそ離れ離れ感を強くするだけだとあきらめたのが顔に出ていた。国文学者の方も同じように興ざめな顔になった。老いると、若いときみたいにむきになって論じ合うこともなくなりますな。心のなかにも寒風が吹きすさんで、淋しいものですとつまらなそうに呟いた。言語学者はあいまいに笑って、じゃあともそもそ立ちあがり、首をひねりながらふん切り悪く出ていった。

ひとつ空席をおいて言語学者と並んで腰をかけていたので、話の間中国文学者はちらちら視線を走らせて反応を窺っていた。言語学者が立ち去ったあと、同じ世代でもあり、話をふってくるものと身構えていたが、一般教養の語学教師と話してみても得るものはないとみくびられたのか、声はかからなかった。自分の場合はどうなのか、いちおうの筋道はつけておいたので、意見を求められなかった欲求不満は大きく、相手にされなかった屈辱もくすぶって、妻のイ

メージはどっかりと居すわり、払っても払っても頭から離れなくなった。妻のことは考えると厄介なのであまり意識しないですませてきたが、今度は中途半端で逃げをうつわけにはいきそうもなかった。国文学者にせよ言語学者にせよ、奥さんをうんざりするほど知りつくしているのがふしぎだった。まもなく六十になるのに、妻がいったいどんな人間なのか摑みかねていた。その挙動のひとつひとつにいまなお驚きとも困惑ともつかない動揺を覚えているしまつだった。妻は築地の料亭でやとわれ女将をしているので、一緒に過ごす時間が極端に少なく、いつまでもなじめないのかもしれなかった。午前十時ごろひとしきり、ばたばたと家中を揺るがす騒ぎをして、迎えの車に乗りこんで出かけていった。たまの休日で在宅していても、行ってきますと挨拶があるわけではなく、お愛想に顔をみせることもせず、ただ足音だけは高らかに響かせて消えていくのだった。ところが、昨日、書斎の戸口にふと気配を感じ、顔をあげると、着飾った妻が扉に寄りかかってひっそり立っていた。一瞬、幽霊かと血がさがった。絵に描いたようにすっきりとすがすがしく、ぞっとするほど冴え渡っていた。これまでは一晩働いて疲れ果て、汚れが浮き出た姿しか目にしていなかったので、この出陣の出立ちはみずみずしく、新鮮に映えた。紅梅、白梅をあしらった黒っぽい着物は肌の白さを際立たせ、清流を思わせる銀色の帯はふっくらとふくらんだ胸と尻を浮きあがらせていて、カメオの帯どめとイアリングと

が妻の身体をもえあがらせるスイッチのように目を惹きつけて離さなかった。ぼんやりみとれていると、妻はふっと身体の力を抜き、かき消えるようにみえなくなった。一瞬の幻で、なにを訴えたかったのかわからなかったが、それだけにその夢のような情景は目にやきついて消えなかった。三十年連れそってきた古女房にぞくっとおののくというのはずいぶん気のいい話と呆れられるかもしれないが、それほどわれわれふたりの関係は積み重ねが薄いともいえるし、また、妻のふるまいが並外れて風変わりともいえた。

最初、妻に惹かれたのも、容姿に目を奪われたからでも、人柄に魅せられたからでもなかった。まわりと融け合わず、なにかといってはぎくしゃく浮きあがるその不器用さが心にかかり、しこったからである。学者や文化人を定客とする京都の古宿の娘だったが、姉が身を惜しまずにくるくると働いて、二十に手が届いてほころびかけた色気を惜し気もなくばらまいているのに対し、膝をかかえてじっと坐りこみ、純な幼さをむき出しにみせていた。それも考えこんでいる風ではなく、途方に暮れ、放心している態だった。人を寄せつけない、頑な閉じこもりだったが、その日は梅雨にけむる庭を朝からみつめつづける横顔に思いつめた表情が浮かび出ていて、思わず声をかけていた。梅雨ってね、農村にとってはこれはもうありがたい恵みですよね。ところが、都会人にとっては迷惑このうえない贈りものでしかない。それが京都では景

仮の宿

根岸の「笹の雪」で豆腐料理の昼食をすませて外に出ると、雨が一滴頬にかかった。降り出したかな、と暗い空を仰いだが、つづいて降りかかる雨滴もなく、しばらく空を睨んでいると、黒灰色に濁った空の奥から逆に鈍い微光が滲んできて、いまにも雲を破り、空の青を滴らせそうにみえた。予定どおり文学散歩を続けることにし、「笹の雪」の角を曲がり、心もち身体を硬くしながらラヴホテルが建ち並ぶ横道に入っていった。連れの美輪子が立ちどまり、空を仰いだ。朝より空は明るくなっているよね、と声をかけると、彼女は身体を揺すって笑い出した。違うの。あのね、尖塔の天辺に展望台みたいなガラス張りのお室(へや)があるでしょう。あそこに泊まったら雲の上にふんわり寝ている感じになるのかなと思って。たしかに左手の五階建てラヴホテルの屋上にはミニ東京タワーといった、鉄骨、ガラス張りの塔がそびえていた。ラヴホテルの建物は城やらケーキやらに象(かたど)られ、どれもどぎつかったが、その誇張にメルヘン的な愛嬌があるのに、曇り空のなかで鉛色に光るこの塔だけはむき出しで、不遜な開放感を漂わせていた。ガラス張りの高みで抱き合うなんて、いかにも特殊な人種の業で、美輪子がこんな変わった装置に夢を誘われたのが意外だった。意外といえば、彼女がラヴホテルの林立する通りをきょろきょろと面白そうに行くのも解せなかった。それもすれっからしのときめきではなく、未知のワンダーランドに迷いこんだ子どものはしゃぎ方だった。それも気恥ずかしくなるほど

大らかな反応だった。根岸の里へ誘いこむのは、いくら文学散歩とはいえ、不謹慎かなとためらったのが、むしろ滑稽なくらいだった。美輪子は服装にも物腰にも奇矯なところはなく、ふっくらと色白な雪国の少女だが、端正な外観からは窺い知れない深い淵を抱えているのかもしれなかった。午前中、龍泉寺の一葉記念館を訪ねたときからすでに軸のずれた受け応えだった。卒業論文の主題が一葉なのに、記念館も知らないというので案内したのだが、陳列室に入って『たけくらべ』の自筆原稿を前にしてもときめくこともなく、逆に固まってしまった。違うんだな、一葉って、もっと思いきって暗い場におかないと強さが輝かないんだな、と展示品をとくにみようともしなかった。自分の感受性を貫く頑固な子だとそのときは思った。地下鉄の浅草駅から一葉記念館まで、仲見世を抜けて旧吉原のど真中を突っ切った。ソープランド、クラブが軒を接する一画に息をのむのではないかと気づかったが、映画のセットみたいとこともなげに片づけられて、かえってとり乱してしまった。閑散とした朝の歓楽街は羽根を抜かれた鳥のようで、埃っぽい風が吹き、廃墟を行く苦さがあった。だらしなく半開きのソープランドの入口に黒猫がべったりと寝そべっていた。美輪子が撫でても、まるで知らん顔だった。縫いぐるみみたいと美輪子はいい気になっていじくり廻したが、黒猫はうるさそうなそぶりさえみせなかった。変なのと美輪子はしぶしぶと立ちあがった。引っかかれなくてよかったじゃな

いかと慰めたら、まるで過保護なママといるみたいと顔をくちゃくちゃに歪めた。赤子のむき出しの表情で、泣いたのか笑ったのかつかみかねた。ホテル街まで連れこんだのも、その謎にいま一度向き合いたい思いもあった。

ホテル街を抜け、目的地、子規庵の前に出た。露出したラヴホテルを見慣れた目には平屋の建物はひっそりと身を隠した後暗さがこもってみえた。格子戸をくぐりながら、待合いに入っていく身のこなしになった。玄関先に立ったとき、首筋に大粒の雨が二、三滴ふりかかってきた。五月半ばにしては、思わず首を縮めたほど冷たい雨で、腹に滴った。とうとうきたかと朝からの気がかりに予定どおりの決着がついたのをみて、かえって気もちが落ちついた。子規庵は八畳の客間と六畳の病間のこぢんまりした構えだが、天井が比較的高いのと、庭に向けてガラス戸が切ってあるのとで、こごまった外観から思い描くほどじめついてはいなかった。庵といっても、趣向を凝らして酒脱に走った嫌味はなく、当たりまえな病人が横になっていた素朴な親しさがあった。一葉が陳列棚のなかにきれいに収められたのに対して、遺品ひとつないがらんとした部屋に立っていると、子規はいまだに現実のなかに横たわっている生々しさだった。

「子規って、開かれた人だよね。病に倒れてからも、来客を待ち焦がれていたし、俳句や短歌の革新運動を主導しつづけていた。死ぬまで外向きだったので、この庵もあっけらかんと明る

いんだ。古典として整理されてなくて、現在進行形なのがみごとだよね」

一葉にとって龍泉寺はいつでも逃げ出せる仮の出店に過ぎなかったが、死病を養う子規はここでひたすら耐え、つもる憤懣を言葉の花火にして爆発させ、なんとか持ちこたえていた。地獄のなかでも音をあげず、冷静に身を持していたが、その我慢のつらさが庵のなかに入ると実感できた。庵の周囲は子規存命当時の草深い隠れ里の俤(おもかげ)はなく、ラヴホテルが乱立して上野の山もみえなくなり、耳を澄ましても鶯やふくろうの鳴声は聞こえず、街を行く車の音ばかりが耳についた。縁側から外を覗くと、右側はなんの風情もない仕もた屋で、二階の窓のてすりに吊りさげられた洗濯ものが雨にうたれてはためいてた。正面と左手はラヴホテルの裏側の壁で、窓が銃眼のように連なり、視線を弾きかえした。入庵料を支払って目にしたい眺めではなかった。別天地で癒されたいという期待ははぐらかれ、俗に汚れた風景を突きつけられて、不愉快さは募るばかりだった。縁側に坐ると、井戸の底に突き落とされた孤独感を覚えた。狭く穿たれた空から矢のような雨が降ってきた。庭の土をえぐる、強い雨脚で、縁側にまではねをあげた。小降りになるまで待とうと、客間に坐りこんだが、居心地は悪かった。となりの病間の壁に子規の写真が無造作にたてかけられていたが、半身を起こし、いざり寄った、そのポーズが気にかかった。まるであざらしだなと不敬なイメージが頭を過った。こちらを凝視する目の光

あとがき

定年退職したら、どこにも行かずだれにも会わず、閉じこもって小説を書いて過ごそうと決めていた。そうして心のなか深く潜りこんで、自分の赤裸々な姿を彫り出したいと思っていた。だが、それならなぜいま流行りの自分史ではなく、小説なのか。

たぶんそれは自分が根っからの嘘つきで真直ぐ生きてこなかったからだと思う。三十五年間、学識もなく人格陋劣なのに、教壇に立ちつづけて世間を欺き通してきた。仮面をかぶった極悪人なので、その正体を暴くには小説という偽の鏡が要るのである。スタンダールは自伝でマイナス×マイナスがプラスに変じるのが解せないと打ち明けているが、ぼくは小説を書きながら自分がまさにマイナスだった自分の精神生活に虚構というマイナスをかけ合わせることで文学作品というプラスを生み出しているのだと実感できた。

もちろん、そうは言っても、自分はコクトオが『詐欺師トマ』で描いたような隙のないいかさま師ではないし、また、プルースト『失われた時を求めて』の主人公マルセルのような骨の

髄からの芸術家でもない。大学の同僚や学生には自分のいいかげんさはとっくに見透かされていたし、のめりこんで書いた作品の大半は編集者から突っ返され、埃にまみれている。

それでは暗く沈んだ老境なのかといえば、それは当たっていない。自分の非才や不運を嘆くことはめったになく、むしろ逆に自分は恵まれているともったいなく思うことの方が多い。曲がりなりにも大学は定年まで勤めあげさせてもらえたし、気のいい編集者にめぐり会っていくつかの作品が日の目をみ、思いもかけない激励や叱責をいただいた。

そして、このたびはこの書物である。ぼくが個個にあげてきた産声をひとつに束ねれば、濃艶なハーモニィを生むのではないかとかねての夢を口走ったのをおふたりの方が真剣に受けとめてくれて、論創社社長・森下紀夫氏を説得してくださった。永井佳乃さんのご尽力を得て、ここに具体的な形をとることができた。

このようにあり余るご厚意を身に受けて感謝の日日である。

ほんとうにありがとうございます。

二〇一七年七月

古屋　健三

【初出誌一覧】

「虹の記憶」『文學界』　二〇〇二年十月号（文藝春秋）

「老愛小説」『文學界』　二〇〇八年八月号（文藝春秋）

「仮　の　宿」『三田文學』二〇〇五年秋季号（№83、三田文学会）

※右記初出より、仮名遣いを改めるなど新たに編集を施した。

❖著者略歴

一九三六年東京下町生まれ。慶應義塾大学名誉教授（文学部・仏文学専攻）。グルノーブル大学文学博士。『三田文学』元編集長。著書に、『「内向の世代」論』（慶應義塾大学出版会）、『永井荷風、冬との出会い』（朝日新聞社）、『青春という亡霊』（NHKブックス）、訳書に、スタンダール『赤と黒』（学習研究社）、『パルムの僧院』（講談社）、ゾラ『野獣人間』（電子書籍版、グーテンベルク21）など多数。

老愛小説

二〇一七年一一月二五日　初版第一刷印刷
二〇一七年一二月　一日　初版第一刷発行

著　　者　古屋健三
発 行 者　森下紀夫
発 行 所　論創社

〒一〇一－〇〇五一
東京都千代田区神田神保町二－二三　北井ビル
電　話〇三－三二六四－五二五四
FAX〇三－三二六四－五二三二
web. http://www.ronso.co.jp/
振替口座　〇〇一六〇－一－一五五二六六

装　　幀　奥定泰之
編集・組版　永井佳乃
印刷・製本　中央精版印刷

©HURUYA Kenzo 2017 Printed in Japan.

ISBN978-4-8460-1633-3

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。